

第2回横浜市新たな劇場整備検討委員会	
日時	2019年7月22日(月)14:30~16:30
開催場所	関内中央ビル10階会議室
出席者 (敬称略) (10名)	明石 達生委員(東京都市大学都市生活学部教授) 新井 鷗子委員(東京藝術大学特任教授) 川本 守彦委員(横浜商工会議所副会頭) 笹井 裕子委員(ぴあ株式会社共創マーケティング室室長、ぴあ総研所長) 残間 里江子委員(出版・映像・文化イベントプロデューサー) 角南 篤委員(政策研究大学院大学学長特別補佐・客員教授) 高橋 進委員(株式会社日本総合研究所チェアマン・エメリタス) 西川 温子委員(元横浜市教育委員、元市立学校長(音楽)) 藤野 一夫委員(神戸大学大学院国際文化学術研究科教授) 本杉 省三委員(劇場計画研究者(元日本大学理工学部建築学科特任教授))
欠席者 (敬称略) (1名)	羽生 冬佳委員(立教大学観光学部観光学科教授)
開催形態	公開(傍聴人7名/報道7社)
議事	(1)新たな劇場整備の検討 (2)その他
資料	議事次第 資料1:委員名簿 資料2:席次表 資料3:第2回横浜市新たな劇場整備検討委員会資料

議事内容

1 新たな劇場整備の検討

2 その他

1 新たな劇場整備の検討

【高橋委員長】

- ・第1回委員会の議事概要について、既に委員の皆様にはお手元に送付してございますけれども、改めて机の上に置かれていると思いますが、字句の訂正を除き、承認いただくということによろしいでしょうか。

【委員】

(異議なし)

【高橋委員長】

- ・承認いたします。字句の訂正がございましたら、後ほど事務局までお伝えいただきたいと思ひます。確定した議事概要については、今後、横浜市ホームページで公開させていただきます。
- ・それでは、第2回委員会の議題に従って進めていきたいと思ひます。なお、ご質問、ご意見については、後ほどまとめてお時間を設けます。各委員からご発言いただく場合は挙手いただき、お近くにありますマイクを使ってご発言いただくようお願いいたします。それでは、まず資料に沿って、事務局から説明をお願いします。

2 新たな劇場整備の検討

【事務局】

- ・(資料3の説明)

【高橋委員長】

- ・それでは、これから委員の皆様にご意見、ご質問を頂戴したいと思ひます。「Ⅰ市民意識・市場動向」、ページで言ひますと19ページまで、「Ⅱ新たな劇場のあり方」、20ページ以降の2つに分けてご意見、ご質問をいただきたいと思ひます。
まず「Ⅰの市民意識・市場動向」について、ご意見、ご質問がございましたらよろしくお願ひいたします。

【残間委員】

- ・質問です。8ページの「文化芸術に関心を持つための要素」に「関心を持つきっかけとしては「無料で見られるコンサートや展覧会が増える」とありますが、これは、コンサートや展覧会が増えると、文化芸術に関心を持つということですか。また、下部の「あまり関心がなくとも、文化芸術鑑賞に行けてしまう」とは、どのような解釈をすればよいですか。関心が無くとも自然に文化芸術鑑賞に行くような環境を作るということですか。「行けてしまう」という日本語が非常に不可思議です。内容は分かりますが、表記が分かりづらひです。

【事務局】

- ・残間委員のご指摘のところについて、言わんとしていることは、気が付いたら、行っていたというような環境を作っておくということが良いのではないかとのことです。

【残間委員】

- ・語法として適切ではないと思ひます。「気が付いたら、行っていた」ということではないと思ひます。文化を醸成して、文化に触れる市民を作るというなら、そのためのプログラムやプロセスを考えることが重要でひです。この文言が入るとごまかされているようにも思ひます。素晴らしいものを作って、市民がはっと気づいて、行きたいという気持ちになって、

行く、あるいはその周辺の市民ではない人たちも、劇場の存在に気付く。そのために、どういう劇場、あるいはどのような運営をしたら良いかを考えることが良いのですが、8ページの上部の四角があるために、気持ちが良くない。ここは内輪で話す雑談なら良いですが、気が付いたら行っていたように仕向けるような感じはあまりよろしくないのではないかと思います。

【事務局】

- ・ 1点目、2点目のポツは、アンケート結果の事実です。矢印は、当局がその結果をどう判断したかを記載したものです。残間委員のご指摘の通り、矢印の部分は、上辺の解釈になっているので、きちんとした考え方を記載したいと思います。

【残間委員】

- ・ これまでの統計資料を基に事務局側で考察していますが、矢印のところは、委員会で議論すべきところだと思います。黒丸2つが調査の結果だということは分かりますが、そのまとめ方がよく分かりません。委員会で発表する資料には、そぐわない気がいたします。

【高橋委員長】

- ・ ほかのページでも矢印があるところがあるので、調査から導きだされ、自然に出てくるものと、少し価値観が入ったものが混在しています。そういう意味では、淡々とファクトを掴んだあとで、それをどう評価・判断するかというところを事務局なりにまとめたほうが、より分かりやすいと思います。

【藤野委員】

- ・ 前回資料2ページの横浜市の現況に、横浜市の年齢区分図がありますが、今年から全体の人口が横浜市でも減ると聞いて、驚いていますが、ボリューム層を見ていくと、65歳以上のところは、それほど変わりませんが、生産年齢人口が減っています。これは、ある意味深刻に受け止めないといけないことだと感じています。私はこの15年ほど兵庫県立芸術文化センターや滋賀県立芸術劇場びわ湖ホールにも関わってきました。そういったところに通いながら、どういう層が実際に、オペラを鑑賞しているかということも観察してきました。兵庫県立芸術文化センターは14年前(2005年)にオープンした際から、年齢層が高く、それが10年以上持ち上がっており、その次の若い世代が参入してきていない状況です。ですから、兵庫県立芸術文化センターはマーケティングも上手いし、戦略的にうまくやってきている、経営的に伸びがすごいところなのですが、それでも、10年20年後は経営的にしんどくなる予感がいたします。自分の実感も含めてですが、1つは時間とお金の問題もあって、子育て、親の介護が終わった女性の年齢層から回帰現象が起こってくると思います。50代半ばから、また劇場に行き始める人が増えてくるということがあると思います。ですから、そこを当面のターゲットにすることはできると思います。でも、ずっとそこが継続するわけではない。そこもこれからどんどん薄くなっていきます。実際には、子育て世代の人たちが劇場に行きたいのにに行けないという欲求があるということがかなり濃厚に出ていると思います。もう1つは、中年の男性があまり舞台芸術に関心が

ないという根本的な問題があります。この2つの問題、当面ではなく、20～30年後を見据えた戦略を考える必要があります。持続可能なマーケティングを考える必要があると思います。

【高橋委員長】

- ・マーケティングという観点で言えば、40歳50歳の男性の関心が低い、というのは、働き盛りで、時間がないということもあるでしょうし、最近では、女性も共働きで時間に余裕がないということではあります。ただし、働き方改革が進めば、時間を空けるということがある程度できるようになってくる。その空いた時間で、家事などを夫婦で協力して行うということもありますが、一方、自己研鑽とか、遊んでしまうのではなくて、自分の能力を高めるために使うという観点が必要だと思います。そこを狙うことも必要だと思います。また、もっと若い世代ということで、子ども達に早くから教育をしていくということがマーケティングという観点から答えとして出てくると思います。

【本杉委員】

- ・3点ほど気になっていることがあります。
- ・1点目は、若い女性、50代の女性が行っていても、男性が行かない、あるいは、その間の年齢の女性が行かないということで、どうして、行かない世代があるのか。かつては社会的なムードが男性を劇場に行かせてくれなかった。当然、残業するだろうという社会のムードが男性を会社に縛っていた。現在は、逆に、契約社員が増えてきて、雇用に不安がある。あるいは、働かないと収入が得られない。ダブルワークしないと、収入が安定しない。という社会的な環境が、男性を劇場に行かせてくれない。あるいは、子育てで外に出て行けない。ここを何とかしないと、いい言葉だけでは、人は来ないと思います。自然に人が来るなんてことはないと思います。
- ・もう一点は、若い時から人が来てくれるためには、かつての日生劇場の活動が参考になるのではないかと思います。日生劇場は、今はあまりそういう活動をしていませんが、全国の子ども達に名作シリーズを見せていました。各地で上演していました。あるいは、東京の小学生を、日生劇場に呼んで、ミュージカルや演劇を見せていました。実際に日生劇場でミュージカルを見て、役者や歌手になりたい、舞台に立ちたいという人達が非常に多く生まれたと聞いています。9ページにあるように、文化施設の充実とは、施設だけが充実してもだめで、施設で行われる活動が充実することが最も重要だと思います。そこには、当然たくさんのお金がかかるわけで、日生劇場は、最初にドイツ、ベルリンのオペラを呼んで上演を行い、当時の男性を含めたお客さん、クラシックファンを感激させたからだと思います。その後、ロイヤル・シェイクスピアカンパニーなどを呼んだりして、非常に高いレベルの劇場活動、文化活動を続けてきました。その時に、そこで働いていた人が、皆様もご存じの著名な方達で、その後の日本の劇場の制作や技術を支える人達が、日生劇場から育って行きました。施設だけでなく、活動することで、人が育っていく。活動というのは、貸館ではなく、創造的な活動をすることで、人が育っていく。ということ考

えると、創造性は、劇場の機能として欠かせないものだと思います。創造性という言葉が、劇場文化において大事なキーワードだと思います。

- ・もう一点、残念ながら 19 ページまでに載っていない大事なことがあるのではないかと考えていて、劇場、文化活動が担う社会での重要な役割は、鑑賞とか創造ということだけでなく、人間の精神的な、人同士の関係を築いてくれる、関係を豊かにしてくれるということがあると思います。そのためには、私は、よく知りませんが今現在、横浜市で、不登校の子がどれくらいいるか、荒れている中学校、高校がどれくらいあるのか、そういう小さな子ども達や子育てをしている若い世代が困っていることが何か絶対あると思うのです。病気や生活の様々な場面などで悩み、苦しんでいる人もいます。そういう人達が劇場にくることによって、あるいは、そういう人達のところに、出向いて行くことによって、社会的な劇場の価値が高まってくると思うので、そういう部分のデータも示していただければ、そこからもう一度、別の議論が出来るのではないかと思います。

【事務局】

- ・3点目に対して、社会包摂という言葉が適切か分かりませんが、社会の仕組みにおいて、文化・芸術がどういう役割を果たしていくのか、一方で今の社会情勢をどう見るのかといった点については、資料として足りないところもあるので、次回以降拡充させていただきたいと思っています。

【高橋委員長】

- ・19 ページまでの調査では、そこまでは、つかめないと思います。市として、文化芸術振興のために、どのような取り組みを行ってきて、どういう実績があって、これからどういう取り組みを行うのか、先ほどの子どもたちを支えていく活動ですとか、そういったことを示していただくことが良いのではないかと思います。市として、どういったことをやってきたのか、あるいは、これからどうしていくのかということが、これからの議論で出ないといけないと思います。

【角南委員】

- ・データで示していくことが難しいところもあると思うので、事例的なものを入れると良いと思います。ニューヨークのジュリアード音楽院の学生がマンハッタンの病院に行っています。音楽や芸術の創造に留まらず、人間そのもののクオリティーオブライフの向上に街を挙げて取り組んでいて、それがジュリアードのプログラムに入っています。実際に、病院の末期がんの患者のところに行っています。グランドセントラル（駅）で大変な賑わいの中で、毎回コンサートをやっています。日常の中に芸術性の素晴らしいものが入ってくることによって、非日常的な体験を、チケットをとって今週いくぞということではなくて、日常の中に自然と入っていけるような、そういったまち全体の取り組みって、ただ単にできるわけではないと思います。マンハッタンですら、試行錯誤しながら、行っています。事例を入れて、ただインバウンドや経済効果の話だけでなく、横浜でやることによって、市民のクオリティーオブライフが色んなところから変わっていくことを事例で見せ

るということも必要ではないかと思います。

【高橋委員長】

- ・その点について、19 ページまでに市のファクトとして示すことは可能ですか？そのあとの文化芸術創造都市に関する資料のところでご説明いただくことが良いでしょうか？

【事務局】

- ・19 ページまでで、数字を使って示せるか分かりませんが、市の社会課題を示したいと思います。一方で、処方箋としての文化芸術との関わり、文化芸術の役割については、事例を使って示したいと思います。今やっていること、あるいは、子どもたちに向けて発信していることをお見せし、最後には、文化芸術創造都市として、どう考えるかということを入れることが重要と感じています。

【高橋委員長】

- ・せっかく、19 ページまでで、ファクトの部分があるので、ⅠとⅡがうまく有機的につながることが大切だと感じています。

【川本委員】

- ・19 ページまでのところで、市の市民意識調査と、文化庁の報告書とリンクさせると見えて、混乱するところがあると思います。例えば、今までは、東京に向かう道路や線路が整備されて来ました。その結果として、ようやく横浜市の昼間人口が、9割を超えたぐらいです。いまだに、土日祭日になると、市民ですら、今日、横浜で買い物しようか東京に行くか考える状態です。ここで注意しないといけないのは、市民意識調査と文化庁の報告書では、サンプリングのベースが異なるので、参考にするのは良いが、今の横浜の実態を考慮して、議論をしないといけないということだと思います。このデータをすべて、同じ土俵のなかで考えると、ちょっと方法が間違っている気がするので、注意していただきたいです。370万人いて、90%ということは、流入人口もいるわけですから、横浜市民でありながら、東京に行っている人もいるということのを頭の中に入れておかないと、間違った結果とまでは言えませんが、議論がなんだか進まないことになってしまうということが起こり得ると思います。

【高橋委員長】

- ・統計上難しい話ではありますが、この話も、なぜ劇場が必要かということに直結している話だと思います。そのあたりが確保されておらず、部外者が見ていると、なぜ建てないといけないのかということになると思います。文化芸術の振興や人の流れを逆転させるという観点が必要だと思いますが、そのあたりが統計やデータから見えてこない部分があります。

【事務局】

- ・移動を伴うものに関しては、横浜の中でも特性の違いがあります。4ページ、5ページで、地区よっての違いが顕著に出ています。ただ、全国の傾向と似ているのは、年齢層・性別での特性で、あまり大きな違いはないです。しかしながら、移動のパターンですとか、

地理的要素による違いがございますので、そのあたりは、若者世代の課題は、横浜も全国もさほど大きな違いはないと思います。これからの処方箋づくりの中では、共通できることと、分けて考えることを明確に示したいと思います。

【笹井委員】

- ・私どもから、12ページの市場規模のデータを提供いたしました。ここから、急にオペラ・バレエが出てきます。そのあとで、オペラ・バレエの劇場を作ろうという話が出てきて、無理やり誘導している感じがしてしまいます。ここに欠けているのは、伸びている分野のものをなぜ作らないかということです。これについては、みなとみらいにライブハウス等ができているからなどがあると思います。横浜市のなかにどういう会場があるか、ハードの面でどういう状況にあるかということ、チケットを買う人達との関係性がどうなっているのかという視点がないと、なんとなく強引に見えてしまい、それ故に説得力が無くなってしまふことを危惧していますので、そのあたりをご検討いただければと思います。

【新井委員】

- ・大人になってから突然文化芸術に関心を持つと言っても、それは難しいのではないのでしょうか。芸術の教育と劇場をセットで展開しないといけないと思います。身近に、無料で鑑賞できるコンサートや展覧会が増えたからといって、すぐ文化芸術に関心を持つ人が増えるわけではないと思います。芸術を愛する心を育む教育施設があつて、質の高い教育が連動して初めて、文化芸術に関心がある人間が育つのではないかと思います。

「3 観光動向」のところで、新しい情報があるのですが、サンクトペテルブルクのマリインスキー劇場の芸術監督のワレリー・ゲルギエフさんが、ウラジオストックに東アジアのオペラ・バレエのアーティストを育成する一大拠点を作る計画があります。ウラジオストックは、ヨーロッパと東アジアのちょうど中間にあるので、そこに、日本・韓国・中国・台湾・香港などを網羅した劇場ネットワークを作り、オペラやバレエの人材を育成し、新しい作品を制作していくという計画です。横浜で新しい劇場を作る際にも、ヨーロッパのオペラ劇場の引越し公演を日本でやるというような今までの国内の劇場のあり方とは何か違った、教育施設も劇場の中に含まれている、東アジアにおけるオペラ歌手やダンサーや演奏家の育成の拠点となる劇場を横浜発でつくることができたらいいと思っています。

【西川委員】

- ・昨日、みなとみらい大ホールで演奏会が開催され、昼間でしたが、多くの方々が集まりました。横浜の有名な作曲家の作品をはじめ、ヨーロッパの方々の様々な趣向を凝らしての演奏でした。とても感動し、興味深く聴かせていただきました。お若い方々から年齢の高い方々まで大変層が厚く、皆さん楽しんで鑑賞されておられました。こういう文化は、素敵だなと感じました。先程来、子どもの環境について、お話が出ていますが、昨今、多くの子どもたちは、タブレット端末のような小さな画面のような世界で遊んでいることが多いので、やや視野が狭くなっているような気がします。大きな会場で、色々なことを体験できたら、子どもには発想力があるので、子どもたちに良い刺激を与えることができ、

より創造性を高め感性を育てることにつながると考えます。先ほどの教育施設と一緒に
なってというお話もありました。横浜らしい、横浜にしかないものができるの良いなと
思います。横浜みなとみらいホールは、子どもたちが、とても誇りに思っています。あそ
こに行けたらいいなと思わせる、そういう劇場が出来たらいいと思います。

【高橋委員長】

- ・データのことだけでなく、あり方の話がでたので、20 ページ以降の「新たな劇場のあ
り方」というところで、文化芸術創造都市の考え方を踏まえたうえでの、新たな劇場の整
備の意義・目標というところで、ご意見・ご質問を頂戴できればと思います。

【明石委員】

- ・子どもの教育、横浜市がどういう子どもを育てたいかというビジョンの一部と連携させる
と施設を作る重要な根拠、説得力が出てくるかもしれないと思って聞いていました。私自
身は、文化芸術に疎いですが、専門の都市計画から考えると、資料に「賑わい」「活性化」
という文言が出てきますが、もっと深める必要があると思います。先ほどから、立地の話
とか、どういうものを作るかというところのお話が出てきており、立地はこれからの検討
ですが、今までに本格的なものを作るというものと、先ほど角南委員がおっしゃった日常
のなかでという、2つのことがあるのですが、推し進めると、両極端になりますが、「日
常」の点については、例えば、東京都はなぜスカイツリーを墨田区に作ったか。都市整備
計画のなかで、随分議論し、絶対に東側だということで、埼玉と最後まで争いました。西
側は、どんどんブランド力を高めているのですが、東側にプライドを持たせなければなら
ないということがあって、現代美術館も江東区に作られました。そういう面で政策という
のは、一つありうると思います。

もう一つ、「本格的」といったところから言えば、本場を作る必要があると思います。ヨ
ーロッパの芸術がなぜ横浜が本場になるのか。というところに引っかかりを覚えます。ロ
シアなら、確かにバレエの本場だったりしますから、たとえウラジオストックという東の
果てであっても、本場になるのかもしれませんが、それを考えると 30 ページの(6)に
連携の視点ということが書いてあります。この連携の視点ということで、事務局が「相
乗効果」とおっしゃった。文化芸術創造都市という全体のなかで、横浜市は、文化芸術創
造都市としての本場を作るという中で、こういうものがあるだろうということになると
思います。劇場が横浜の大きなイベントでどのような役割を果たしていくかという検討
が必要だと思います。この中で言うと整備の方向や議論が進んで行って、立地をどうす
るか、ということが出てきますが、私自身の考えでは、相乗効果を推して行った方が良いか
なと思います。文化芸術創造都市全体のなかでの役割を明確化すると、もしかすると教育
のこともあるかもしれませんが、そうすると色んな広がりが出てきて、場所の必然性がで
てくると思います。これからの検討ということになるとと思いますが、「(6) 連携の視点」
で補足があれば、事務局の方にお伺いしたいなと思います。

【事務局】

- ・第1回でエリアとして、都心臨海部を考えているとお伝えしております。都心臨海部と言っても、横浜駅のあたりから、山下公園のあたりまでとかなり大きな意味では、小さい凝縮されたエリアと言えますが、劇場を建てるという意味では、広いエリアだから、どこが良いかを考える必要があります。一方で、作れば良いというわけではなくて、他の関連施設とどうつないでいけるのかということが重要だと事務局なりに解釈いたしました。現実的には、場所が空いてないと作れないものですから、内部で検討しています。今回は、まちづくり系のアプローチがほとんどない状態ですので、第3回・第4回でそのような点について、各委員からご意見をいただければと思います。

【高橋委員長】

- ・本委員会は、文化芸術創造都市の計画を議論する場ではありませんが、横浜市がなぜ文化芸術創造都市という言葉掲げてきたのか、何をやってきたのかをある程度示す必要があると思います。その中に、たぶん、子どもを育てるとか子ども達の情緒なり感性を育てるといったことが入っているはずで、そのようなことを議論の共通点として置いておかないと、皆さんから色々な意見が出てしまうかなと思います。また、28ページの「新たな文化創芸術造都市に向けて」で、環境の変化が書かれていますが、今まで横浜市は文化芸術創造都市を掲げて、政策を実行してきましたが、昨今の環境変化で、さらに今までの流れを強化しなければならなくなっており、その中核に新たな劇場整備が必要という考え方だと思いますが、そこが、なかなか明示的に示されていないので、その展開のところが明確に示されないといけないのではないかと思います。例えば、従来、文化創造は、国が担ってきました。しかし、日本は予算がかつかつで、貧すれば鈍するではないですが、文化芸術・教育にお金が使えないというなかでも、都市は、世界の都市と競争していかなければなりません。そういう意味では、国にばかり任せておけず、都市間競争を生き抜くためにも、都市の成長戦略が必要です。横浜では、それが、文化芸術創造都市なのだと。さらにそれを強化していくことで、中核として、劇場を作るわけですが、それはハードだけじゃなくて、市として、子ども達を含めて文化創造というところを強化していく、それが、人々の情緒・感性・創造性を養い、イノベーションが生まれるというストーリーが必要だと思います。データ等の材料はたくさん用意してありますが、その辺のストーリーが弱いかなという気がします。

【藤野委員】

- ・文化（芸術）創造都市というコンセプトが出てきて、20年くらいたっていると思います。クリエイティブ横浜ということで、かなり計画的かつ先端的に街づくりを進めてきたと思います。「新たな」文化創造都市のどこが新しいのかを示す必要があると思います。「新たな」ということは、バージョンアップ、リセットがあるということですね。そういう意味を、しっかりさせる必要があると思います。私は、30年東京にいて、30年神戸にいて、行ったり来たりしているのですが、やはり横浜の魅力は、子どものころからよく知ってい

て、クリエイティブシティを掲げたときも、一番大きなトリガーとしては、横浜トリエンナーレがありました。今は、美術館に収まっていますが、昔はもっと面として、展開していました。所謂オルタナティブスペースとして、BankARTをはじめとして、使われなくなった施設に、先端的なアーティストが入り込んでいって、新しい実験をたくさん行っていました。そこに私は、わくわくして注目していました。この20年間で、そういった取り組みがどのようにレビューされているのか。オルタナティブとか、ハコモノではないところでやってきた、クリエイティブシティが、今回劇場を作るという方向に展開していくときに、なぜそれが今必要になってきたのかをしっかりと説明しておく必要があると思います。私は、両方すごく大切だと思います。今なぜ、本格的なオペラハウス仕様の劇場を作るのか。20年間にわたって日本の先端的な芸術をリードしてきた横浜だからこそ、整備のためのエビデンスが必要だと思います。

【高橋委員長】

- ・横浜は、区民文化センター等が充実しており、活動している方も多いと思いますが、お金だけの話をすると、もっと数を増やしてくれという声もあるかもしれない、最先端のものをつくること、本場のものをつくることと、底辺を支えることの両方を一緒に行う必要があることの動機付け、説明をする必要があると思います。それをやって初めて、市民の側から創造性が生まれて、本当の文化芸術創造都市になるのではないかと思います。そのような理想・理念をちゃんと掲げる必要があると思います。

【西川委員】

- ・小学校の、児童音楽会を各区の公会堂等で開催しています。中学校では、合唱コンクールが盛んです。合唱は、クラスの一人ひとりが協力し、創りあげるという大変意義のある貴重な機会となっています。全校生徒が一堂に集まり、お互いの演奏を聴きあう場として、体育館は、音響の面からしても望ましい発表の場ではありません。中学校は、145校あり、また、発表の時期が重なってしまうということもあるかもしれませんが、区の公会堂だけでは会場が間に合わず、横浜から出て、鎌倉芸術館、横須賀芸術劇場、海老名、相模原、川崎等の遠くまで出向き、一日かけて実施している学校も多く見られます。高等学校も音楽活動は盛んで、音楽会の会場は、ほとんど区内ホールで実施しています。内容は、吹奏楽・合唱・オーケストラ弦楽合奏等です。中でも吹奏楽の演奏が多く、しかもほとんどの高校が大編成です。通常、天井から反射板をおろし、両サイドにも反射板を用意するのですが、出場する生徒の人数が多く、横の反射板はつけられず、客席におりますと、音は聴こえているのですが、全員の顔が見えないという状況です。横浜みなとみらいホールは、金銭面や予約を取ることが難しく使えないことが多いです。子どもが活動する発表の場所を確保できることが課題となっています。また、横浜に劇場ができることで、大人の方にとりまして大変有り難く、横浜の文化活動がより活発になり、子どもたちにとりましても、素晴らしい本物の体験の場が広がり、成長に良い影響を与えたいと思います。

【本杉委員】

- ・ 24 ページの「選ばれる劇場」という視点はとても良いと思っています。選ばれるためには、他よりも付加価値が高い、魅力を持っているということが大切です。仮に、これから子どもの小学校入学にあたって、引っ越しを考えたら、良い小学校がある、近くに公園があるとか、近くに文化施設があるとか、良い環境に行きたがると思います。いろいろなものを尺度に考えるとと思います。自分の家を持っていない人には、良いきっかけだからということで、引っ越しをされる方もいらっしゃると思います。建築的にも平凡で凡庸なところよりも、魅力的なところを選ぶと思います。それを劇場に当てはめた場合、今ここで書かれている文章は、ホールを借りる人、施設を借りる人に選ばれるという視点で書かれていると思います。そうではなくて、お客様に選ばれる劇場になる必要があると思います。お客様に選ばれるためには、先程来言っている、活動とか創造的なものが大切だと思います。
- ・ もう一つ大切なのは、建築、施設だと思います。古くは、劇場でポスターになるようなものは、パリのオペラ座と 20 世紀だとシドニーのオペラハウスだとか、最近だとハンブルクのエルプ・フィルハーモニー、オスロの新しい劇場も広場として、海に面しており、素晴らしい建築デザインになっています。建築をほかにないデザインで作ることが非常に重要だと思います。今のような状況だと黙っていると、PFI になったり、あるいはデザインビルドになったりしがちです。それが悪いと一概には言えませんが、どうしたら、歴史に残る建築・劇場を作れるか、市民の皆さんに提供できるかということを含んでほしいと思います。横浜は、もともと近代建築、レンガ造りが非常に多くて、それを目当てにいらっしゃる観光客の方も少なくないと思います。横浜市は、非常に良い建築政策を取ってきた伝統があります。有名な建築家の建物がいくつもあります。しかしながら、ここ数年、良い建築をつくらうという機運が横浜市には不足しているように感じています。横浜は、緑が多く、住みやすいです。子どもを育てるには良い環境だと思います。ただ、働いている人からは選ばれない。そこをどうやったら、選ばれるかというところを建築の文化的価値を含め、幅広く考えてもらえればと思います。貸しホールで施設を借りる人だけに選ばれるわけではないということが大事じゃないかなと思います。

【高橋委員長】

- ・ 「建築として、選ばれる施設」これは皆さん、ご異論ないのではないかなと思います。民間活用のお話が出たので、問題提起いたします。28 ページの(4)に実演団体の育成が記載されていますし、それから 27 ページでも公的支援について記載されています。最近、PFI・民間活用がブームになっていて、民間に任せようという機運がありますが、今まで拝見している文章からにじみ出てくるものは、そういう手法を使ってもいいけれども、市としての良いものを作っていくという覚悟で、予算をつぎ込んでいくという、文化活動を支えるためには、それなりの覚悟が必要だということがにじみでると思います。このあたりをきちんと文章にしていきたいと思います。ただし、お上だけが空回りして良いわけではな

いので、民間・市民も誇りを持って、支えるという観点から、良い建築が必要だと思えます。選ばれる劇場という意味では、市民は納税者であり、チケットを買う人でもあり同時に寄付してくれる存在かもしれません。企業も同様だと思います。ですから、誇りに思える劇場なり、システムがあることが非常に大切だと思います。そのためには、公的な関与をしっかりと行い、合理的な管理をきちんと行うという姿勢を強調しても良いと思えます。そのために、政府に対して支援をある程度、提案しても良いのではないかと思います。実演団体とか芸術家を育てる責務が市だけでなく、国にもあることを訴えかけても良いのではないかと思います。

【新井委員】

- ・この資料を最初から見ていくと、「文化芸術に関心が無い人がたくさんいます」、「観劇層が高齢化しています」等、オペラ劇場が必要ないという資料になってしまっているように感じます。実は、良い劇場は足りていないというのが現状です。東京でも、人気のある劇場はアーティストや興行団体が日程を取り合っていますし、劇場が全く足りていない状況です。そのことをもっと資料に書くべきではないでしょうか。劇場が本当に必要なんだ、子どもたちの憧れの場所なんだ、そこの劇場に行ってみたい、見てみたい、ステージに立ってみたい、というみんなの憧れの場所となるような劇場が望まれている、というストーリーを資料に書いたら良いのではないかなと思います。

【明石委員】

- ・西川委員、さきほど合唱コンクール、バレエのお話がありましたよね。合唱の甲子園、バレエの甲子園は、今はどこにあたるのですか。

【西川委員】

- ・合唱は、NHK とか TBS 等のコンクールがあります。クラスで行う合唱コンクールは、校内で賞をつけているようです。クラブや部活動等では、NHK や TBS の合唱コンクール等に出場し、上位を目指して頑張っている学校があります。

【明石委員】

- ・子ども達が、最後に夢をかなえる場所があるといいなと思いました。そのようなものは、NHK ホールということですね。

【高橋委員長】

- ・言い過ぎかもしれませんが、第九をバックで合唱できるというところまで行くとすごいですよ。

【残間委員】

- ・神奈川県は、合唱が盛んでした。合唱連盟の会長が神奈川県にいらしたから、他所とは、素地が大きく違います。
- ・前回、ネガティブな要素もきちんと踏み込んで、議論すべきではないかと言いましたが、全体を読むと、「劇場建設が難しい」、「要らないのではないか」という方向性に見えてしまいます。男性も時間があれば観劇に行くかということ、労働環境の問題だけでなく、

もともと文化に対する考え方が異なっているという課題もあるかと思います。このままでは、どんどん「要らないのではないかという」方向に行ってしまうので、ここからは、新たに、いかにして、「文化芸術創造都市」として、この国の中で際立たせるか、さらに言えば、横浜という土地で際立たせるための戦略の一つとして、「他に比類なき劇場、素晴らしい劇場を作りましょう」ということがスタートだと思います。この資料を読んでいると、日本人は観劇に行かないし、笹井委員がおっしゃったように、他のものと比較すると、そこだけ取って付けたように書いてありますが、他のポップ系の催しには、多くの人が行っているわけだし、バレエとオペラに特化した資料ばかり出してくると、どんどん否定的になるような気がします。

今日の議論を伺っていると、横浜市は多くの取り組みをやっていると思いました。それをちゃんと網羅すると、「こんなに多くの取り組みを行ったのに、なぜ今のような状況なのか」ということはもちろんあるのですが、全国から横浜市をみると「文化芸術創造都市」に見えます。だったら、そのイメージをもっともっと高めるためにという視点と、新井委員がおっしゃったように、「ちゃんとした劇場が日本全国にない」という情報を盛り込み、資料の整理の仕方を考えるべきだと思います。まだまだ高いポテンシャルがあると思いますから、改めてここで劇場を作って、この辺りをもう一度前面に打ち出して行くべきだと思います。あまり理想にばかり走ってもいけません、難しい話ばかりではなく、3回目からは、夢と希望がある方向性へもっていかないと、議論は「いらぬのではないか」という方向性に行ってしまうという気がしてなりません。

【高橋委員長】

- ・国が文化・教育予算を増やさない方向性に位置付けて、この体たらくです。地域から変える姿勢・意気込みを横浜から出して良いと思います。出てない論点で言うと、先程のウラジオストックの整備の話があって、ちょっとショックなのですが、28 ページの(6) グローバル化というお話があって、この中で、他のアジアとのつながりということを述べられていますが、アジアだけでなく、ヨーロッパ・世界を見据えていく必要があると思います。ウラジオストックには、購買人口はないですね、横浜は、10万20万あるいは、周辺には素晴らしい人口があるわけですから、横浜を文化芸術のハブ、オペラやバレエがかなり強いのだという位置づけをもっと打ち出しても良いのではないかなと思います。例えば、クルーズは、今はまだ中国人が中心で、日本人も少ないですけど、最近話題になってきているものに、フライ&クルーズと言って、ヨーロッパから飛行機で日本まで来て、そこからクルーズをするというものがあります。一晩、オペラを見て、横浜からクルーズに出るということもあるから、客層が日本人だけでなく、ヨーロッパの人もあてにできるわけです。そういう意味でも私は、グローバル化という視点を忘れてはいけないと思います。

【川本委員】

- ・劇場を造るのは、横浜の将来のための手段であって、その先を見据えて、位置づけをする

必要があると思います。整理のやり方で、都心臨海部におけるどういう役割を持つのか、子どもと教育等を上手く整理して、作る作らないという論点だけでは、ダメだと思います。広い視野で、劇場がどういう位置付けになるのかということを考えることが必要だと思います。

【西川委員】

- ・ 28 ページの（４）のところ、3行目に、「地域レベルの伝統芸能の保存活動」ということが記載されていますが、地域で大切に受け継がれてきたお囃子や踊りなど、様々なものがあります。それが上手く引き継がれていないということがあります。実際には継承することが難しい地域もありますが、子どもたちに上手につないでいる地域も結構あります。
- ・ 26 ページの人材育成のところについてです。芸術家の卵というのでしょうか、大学を卒業し、凄い力をつけてきたのに、次の活動につながらない方が結構いらっしゃると思います。熱意を持ちもっと研究をしたいという人たちが活躍できる受け皿があっても良いかなというふうに思っています。日本は、研究を続けたい人達にとっての支援環境が弱いように感じています。能力ある人達が、海外に出てしまうケースもあり、もったいないなと感じています。

【藤野委員】

- ・ 25 ページの劇場タイプ A、B、C のどれを選択するかということが根幹に関わってくると思うのですが、その次の 26 ページ、27 ページの細かいところから見ていくと、27 ページの一番最後、各国の予算比率の上のところ、舞台芸術には、演劇、音楽、舞踏等のさまざまな分野があります。だけど、その経費とか制作の方法は違います。例えば、先行投資型として演劇、オペラ、バレエ、ダンスなどがあると。もう一つは人材活用型としてオーケストラや伝統芸能がある。こういう物の見方は確かに可能だと思うし、日本の現状を見ると、こういう整理の仕方もあり得ると思うのですけれども。ただ、これは本質的な区分ではないし、それから、国際的な視野でいうと、この区分は本来は当てはまらないはずなのです。つまり、なぜ演劇やオペラやダンスが先行投資型になるかという、日本のように長い期間をかけて公演が 1 回か 2 回しかない、それでおしまいということですね。それで製作した舞台を壊してしまうということなので、先行投資型というふうに言われてしまうのですけれども、例えば、ヨーロッパの劇場で言えば、演劇にしる、オペラにしる、バレエにしる、ダンスにしる、レパートリー化していくわけですね。初期投資は、例えば 1 億円かかったとしても、それが 200 回、300 回公演されていくわけですから、減価償却されていく。だから、実はオーケストラ、伝統芸能と演劇、オペラ、バレエとは違いはないわけです。あるいは、巡回公演をしていけば減価償却していく。日本では、演劇とかオペラというのは、稽古に 6 週間とかかかるわけで、それを考えると、実際にチケット収入で回収できる部分はすごく少ないという固定観念があります。けれども、実際に制作したものがどれだけ使用価値をうみだしていくかが大切です。海外の劇場の尺度でいえば、先行投資型と人材活用型の区分というのは、必ずしも成り立たないと思います。

- ・そういうふうには展開していくためにはどうするかということになると、26 ページの人材育成のところだと思いますが、劇場人というのが恒常的に活動できる、生活できるような基盤を形成していく必要があるわけです。それは人材育成の後、育成された人材が自分たちの能力を発揮できる場が、国内で確保されている必要があるということです。そうすると、やはりこれはある意味で必然的と言えるかもしれませんが、目指すべき姿としては、Aのタイプを目標にする必要があるのではないかと。日本でレパトリーシステムとか、オペラにしろ、バレエにしろ成り立っているような劇場はないので、かなりリスクになることが多いのですけれども、でも、僕は客観的に世の中を見ていて、370 万人の人口を持つ横浜市以外で、今後日本の地方自治体で、出来る場所は他にはないと思います。レパトリー型で人材育成も含めて、そして実演者や、それに関わる技術者が劇場で食べていけるような基盤を作る必要があると思います。それは、日本で横浜をおいて他にはないと思います。

【高橋委員長】

- ・先生は関西をよくご存じだと思うのですが、関西はそういう面では下地があるような県や地域が多いと思うのですが、そういうものは出てきませんか。

【藤野委員】

- ・まず1つは、日本は災害が多いのでどうなるかわかりませんが、阪神淡路大震災後の神戸は二十数年、借金返済で大変でした。今日でもまだ返せていません。芦屋のようにリッチだと言われていたところでもまだ借金がたくさんあります。実は文化芸術からがざっと切られて、ゼロベースから始めて、どうにかどうにか25年たって、今の地点まで来ています。兵庫はそういった逆風の中でもあえて15年前に大きなものを作って成功に導いているし、それがいわば光とか灯台的な役割になっているのですけれども。横浜と関西では、財政的な基盤が大きく違うと思います。
- ・唯一、滋賀県の人口が今後30年、減少しません。比較的安定しているので、(滋賀県立芸術劇場)びわ湖ホールは、一時ちょっと危機的でしたけれども、滋賀県は、130万人しかない小さな県ですけれども、質の高いものから裾野の広いものまで、できるホールでやっていくチャンスがあると思います。

【残間委員】

- ・人材育成に絡むと思うのですが、日本の現状は、名だたる演出家が、劇場付きの芸術監督になっています。劇団経営は、最近かなり大変になってきていて、劇団を維持するのは、とても大変で、それこそ、座長や団員がコマーシャルに出たり、ドラマに出たりして、その稼ぎを全部、劇団につぎ込んでもなかなかうまく行かないという状況です。それを覆したのが、浅利(慶太)さんの「劇団四季」で、株式会社化して、アルバイトをしなくてよくなり、演者が育ったわけです。あれは、商業ベースと芸術性との間でどうなのだという議論もあると思いますが、維持していくためには、経済的手立ても考えなければならないと思います。現状上手くいっているように見えている劇場も、バックグラウンドに、権力

に近い人がついていたたり、芸術監督がついていたたりします。

- ・芸術性と商業性をどうとらえるかというのは、議論がありますが。やはり、サポートしてくれる企業なりを、どうやって連れてくるか。天王洲アイルが開場した時は、三菱をはじめ、いくつかの企業が名を連ねて、支えた事例があります。最初は私たちこそ演劇を支えているという誇りを持っていたのが、1社消え2社消え、だんだん消えていきました。ただし、個人にだけ特化して、芸術監督を連れてくれば良いのかというと、それも現状では、難しいような気がします。

【高橋委員長】

- ・最後に私から次回の予定ですけれども、お願いがございます。検討を深めるために委員の皆様には、議論の参考になるような資料があれば、事務局にご提供をお願いいたします。
- ・次回は検討委員会の折り返しになります。ある一定の方向性を持つべきです。そこで事務局には、これまでの議論の取りまとめに加えまして、劇場のあり方についての整理、舞台芸術のこれから等についての整理をお願いいたします。場合によってはヒアリングなどによる実態把握などの作業もしていただきたいと思えます。
- ・それからもう一つ、今日ご欠席の委員に、今日のことをご説明いただくようお願いいたします。

【事務局】

長時間のご審議、誠にありがとうございました。次回委員会の日程につきましては、今後調整させていただき、改めてご連絡させていただきますので、よろしくをお願いいたします。以上を持ちまして第2回委員会を終了いたします。ありがとうございました。